九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

音声コミュニケーション障害を有する患者のヘルスリテラシーに対する薬剤師の役割に関する研究 : 先天性聴覚障害者と喉頭摘出者を対象として

俵口, 奈穂美

https://hdl.handle.net/2324/1785382

出版情報：九州大学, 2016, 博士（臨床薬学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏　　名	俵口奈穂美
論　文　名	音声コミュニケーション障害を有する患者のヘルスリテラシーに対する薬剤師の役割に関する研究 －先天性聴覚障害者と喉頭摘出者を対象として－
論文調査委員	主　査　九州大学　　准教授　　島添　隆雄 副　査　九州大学　　准教授　　江頭　伸昭 副　査　九州大学　　准教授　　松永　直哉 副　査　九州大学　　准教授　　窪田　敏夫

論文審査の結果の要旨

今日、自分の健康を主体的に管理し、健康や医療に関する意思決定に積極的に関わることが求められている。そのため、個人が健康問題に対して適切に判断を行うために必要な基本的な健康情報やサービスを獲得、処理、理解する能力であるヘルスリテラシーが注目されている[1)]。医療者は患者のヘルスリテラシーを評価することによって、そのリテラシーに合わせた効率的な情報提供を行うことが可能になる。そして、患者のヘルスリテラシーに応じた健康や疾病、保健医療サービスなどに関する情報を分かりやすく提供することが必要である。視力障害者への薬剤師の取り組みとして、点字シートや音声ガイド機能を活用した薬袋による服用方法の伝達の報告がある[2)]。

医療従事者は患者のヘルスリテラシーの低さやコミュニケーション能力を考慮して対応しなければならない[14)]。先天性聴覚障害者と医療者との不十分なコミュニケーションや薬物療法についての知識不足は、誤診やヘルスケアについての誤った認識を招き、副作用などの健康被害へと繋がる可能性がある[3,5,9,15-17)]。それゆえ、先天性聴覚障害者がどの程度薬に関する情報を理解しているかを把握することは重要である。しかし、これまでの研究では、先天性聴覚障害者と医師とのコミュニケーションや、医師の説明の理解度についてなど、先天性聴覚障害者と医師との関わりを対象としたものがほとんどであり、先天性聴覚障害者と薬剤師とのコミュニケーション、薬についての理解度についてはほとんど報告がなく、先天性聴覚障害者の薬の使い方に関する理解度については明らかになっていない。喉頭摘出者は手術後の生活や術後の症状に適応する努力をしながらも、再発のリスクや症状への不安を抱えて生活をしている[13,18-20)]。喉頭摘出後は便秘、不眠、痰が絡む、気管孔周囲の皮膚乾燥などが起こるが、これらは生活上の注意や薬によって対応が可能である。しかし、喉頭摘出者が喉頭摘出後の症状の原因、日常生活の対応方法、そして、薬物療法についてどの程度理解し、安心感を持っているのか明らかになっていない。

患者のヘルスリテラシーの向上のために、薬剤師は健康や疾病、薬の使い方などに関する情報を分かりやすく提供することが必要である。そのためには、患者のヘルスリテラシーを評価することによって、そのリテラシーに合わせた効率的な情報提供を行うことが大切である。本研究では、音声コミュニケーション障害を有する先天性聴覚障害者と喉頭摘出者の薬の使い方や症状についての知識、安心感を把握し、薬剤師が薬の使い方についてリテラシーに応じた講義を行い、知識と安心感の向上に貢献した。

第１章では、先天性聴覚障害者の高齢者の薬の使い方に関する知識を把握し、薬剤師が先天性聴覚障害者の読み書きのリテラシーに応じた薬の使い方に関する講義を行った。先天性聴覚障害者の高齢者の知識は難聴者、健聴者、先天性聴覚障害者の高校生より低いことが示唆され、薬剤師による講義が、薬の使い方に関する知識の記憶の向上に役立つことが明らかとなった。一方、先天性聴覚障害者は自身の理解度を過大評価していることも明らかになった。薬剤師が先天性聴覚障害者とのコミュニケーション障害について認識し、先天性聴覚障害者の薬の使い方の知識を把握することは、効率的な情報提供を行うことに寄与できることを示した。

第２章では、薬剤師が喉頭摘出後の症状の要因、生活上の注意、症状緩和に使用される薬にいて説明、患者相互で術後症状についての情報を交換する教室を行い、喉頭摘出者の術後症状についての理解度、安心感が向上した。患者会における薬剤師による喉頭摘出者の術後の症状、服薬状況の確認、症状や服用状況を伝えるコミュニケーションシートの作成、医療者とのコミュニケーションの現状の把握が、効果的な薬物療法に寄与することを示した。

以上、本研究により、薬剤師が音声コミュニケーション障害を有する先天性聴覚障害者と喉頭摘出者に対し、薬の使い方や症状についての知識と安心感を把握し、リテラシーに応じた講義を行うことで、その知識と安心感が向上できることが明らかとなった。今後も薬剤師が先天性聴覚障害者と喉頭摘出者の薬の使い方や症状についての知識、安心感の向上に貢献することで、ヘルスリテラシーの向上の実践が可能になると期待される。

本論文は、上記の内容を記述している。これまで、我が国において障害者に対する薬剤師の関わりについて報告されたことはない。第１章では聴覚障害者、第２章では失声者と異なった障害を有する患者の薬学的管理に取り組み、病院薬剤師の新たな職能について評価している。本論文は、我が国における臨床現場の報告として全く新規かつ優れたものであり、博士（臨床薬学）の学位に値すると認める。